

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 4 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370548

研究課題名(和文) 英語の構文における基本形と変種に関する大規模コーパスに基づいた生成理論的研究

研究課題名(英文) A Large-Scale-Corpus Based Generative Theoretical Study on Basic Forms and Derivative Forms in Constructions in English

研究代表者

大室 剛志 (OMURO, Takeshi)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：70185388

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：英語の同族目的語構文、動作表現構文、One's Way構文、'd rather S構文において、それぞれの構文の基本形と変種を同定した。その際、膨大な言語資料の収集に英語の大規模コーパスThe Bank of EnglishとThe British National Corpus等を用いた。生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、更には構文文法といった複数の最先端の言語理論を用いて構文における基本形から変種への拡張のメカニズムを解明しようと努めた。

研究成果の概要(英文)：In this research, I identified basic forms and derivative forms in Cognate Object Constructions, Gesture-Expression Constructions, One's Way Constructions and 'd rather S Constructions in English. To do that, I used such Large-Scale-Corpora as The Bank of English and The British National Corpus. I made a great effort to explore mechanisms of extension from basic to derivative forms in these constructions, using such most up-to-date theories of grammar as generative syntax, conceptual semantics, dynamic theories of grammar and construction grammar.

研究分野：人文学 言語学・英語学

キーワード：英語の構文 基本形 変種 大規模コーパス 生成文法 文法拡張のメカニズム 構文の成立過程 半動名詞構文

1. 研究開始当初の背景

生成文法の意味論にあたる概念意味論を構築している米国の研究者 Jackendoff は、Jackendoff (1985, 1990)により、英語の climb という動詞の意味は、上方へ (UPWARD) と手足を使ってよじよじと (CLAMBERING) という2つの条件が同時に満足された時が典型で (e.g. Bill climbed the mountain.) その一つの条件を欠いたものは climb の意味としては可能は可能であるが、非典型となることを示している。Bill climbed down the mountain. では条件 UPWARD がキャンセルされ非典型、The snake climbed the tree. では条件 CLAMBERING がキャンセルされ非典型となることを動詞の意味に関して示している。また、米国の認知言語学者の Lakoff も Lakoff (1987)において、心理学者 Rosch (1978)の研究を踏まえ、さまざまな言語的範疇が典型例を中心に放射線状に広がる周辺メンバーから形成されている事を示している。動詞の意味や言語的範疇といったいわば言語の基本要素においてこのような典型と非典型とが見られるとすると、言語の形の面でもやはり典型と非典型とが存在するのではないかとの考えは自然と発想される。

よって、本科研では、英語の構文にも基本形と変種が存在するという観点から、私自身がこれまでに扱った英語の構文である同族目的語構文、動作表現構文、One's Way 構文を見直し、そこに見られる構文を成り立たせているメンバーを、基本形と変種という形で整理し直す。その際、各構文を成り立たせている、優先条件 (上記の UPWARD と CLAMBERING に相当する条件) を各構文の統語的属性と意味属性を解明することによって同定する必要がある。そして、上記の climb の場合と平行的に、同定された優先条件のうち、どの条件がキャンセルされるとどのような変種が存在するのかを見極める必要もある。基本形、優先条件、変種の同定を行うには、自分がこれまでにある程度は研究した構文を用い、そこで見られた統語属性や意味属性を整理することが有効である。なお、One's Way 構文に関しては、構文文法の研究者である Goldberg (1995)が make one's way が基本形であるとの主張を既に行っていることも私自身の本科研での研究方向が間違った方向に向いていない事を示してくれている。

優先条件の体系で構文が成立していることを更に確認するには、しかしながら、英語の非常に末梢的な構文においても基本形と変種が存在することを新たに示す必要がある。そこで、本科研では、上記3つの構文に加えて、これまでは、殆ど研究されていない would rather が文を従える、英語の非常に抹消的な構文 (e.g. I'd rather you didn't.) を取り上げて (Culicover (1999)のみが注目しているにすぎない) この構文においても、

基本形、優先条件、変種の同定を行う。

2. 研究の目的

本研究の研究目的は研究課題に盛り込んだ次の3点である。

(1)英語の単語の意味には、典型的な意味と非典型的な意味がある。この観点から英語の構文を見直す。同族目的語構文、動作表現構文、One's Way 構文、更には、殆ど研究されていない would rather が文を従える英語の抹消的な構文 (e.g. I'd rather you didn't.) に関して基本的なメンバーと変種的なメンバーが存在することを明らかにする。(2)その際、詳細な事実調査をする必要があるが、大規模コーパス The Bank of English(約5億語)と British National Corpus(約1億語)を用いる。(3)生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、更には構文文法といった複数の最先端の言語理論を用いて構文における基本形から変種への拡張のメカニズムを解明する。

本科研の研究課題を達成するためには、現代英語の大規模コーパス、The Bank of English(約5億語)、The British National Corpus(約1億語)等を有効に利用して、まず上記3つの構文と英語の非常に抹消的な構文である(would rather が文を従える構文に関して、膨大な言語資料を収集する必要がある。特に、今回の科研で新たに取り上げる(would rather が文を従える構文については、英語の非常に末梢的な構文であるため、母国語話者の直感や手作業による資料収集だけでは、当然ながら、分析に十分な言語資料が質、量とも得ることが極めて困難である。そこで現代英語の大規模コーパスを有効利用して膨大な言語資料を収集する必要がある。そうして収集した膨大な言語資料を、複数の最先端の言語理論、生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法などの観点から、細かく観察し、鋭く深く分析することで、これら4つの構文の統語属性と意味属性を詳細に解明し、これら構文を成立させている優先条件を正確に同定せねばならない。これを達成するためには、当然、上記の複数の最先端の言語理論の内容を、最新の文献までつぶさに読むことで深く理解し、上記構文を分析できるまでに、身につけなければならない。資料収集と資料の観察、分析、そして複数の最先端言語理論の深い理解には、これまでの研究の積み重ねがあっても、少なくともこの科研の最初の2年間が最低でも必要である。更に、優先条件を正確に同定した後、優先条件のどの条件が欠けるとどのような変種が許されるのかを4つの構文に関して分析していかなければならない。なお更に、基本形から変種への拡張がどのようなメカニズムによりなされているかを解明するには、これら4つの構文に共通に

見られる拡張のメカニズム等に対する深い分析、考察が必要になる。これを行い、かつ幾つかの学会で発表し、幾つかの論文にまとめるには、少なくとも残りの1年が必要となる。

3. 研究の方法

最初の2年間で、同族目的語構文、動作表現構文、One's Way 構文、'd rather が直接文を従える構文それぞれに関して、申請者自身が指摘したこれまでの言語事実を今回の科研のテーマである構文における基本形と変種という観点から整理した上で、新たに現代英語の大規模コーパスを有効に利用して膨大な言語資料を収集する。収集した膨大な言語資料を、複数の最先端の言語理論、生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法を深く正確に理解し、それらの言語理論の観点から、細かく観察し、鋭く深く分析することで、これら4つの構文の統語属性と意味属性を詳細に解明し、これら構文を成立させている優先条件を正確に同定する。最後の一年は基本形から変種への拡張のメカニズムを考察し、研究成果を学会発表と論文の形でまとめる。

平成25年度:

(1) 本科研で扱う同族目的語構文、動作表現構文、One's Way 構文、'd rather が直接文を従える構文、それぞれに関して、申請者自身の研究論文、拙論(i)「同族目的語構文の特異性(1)-(3)」『英語教育』11月号, 74-77, 12月号, 78-80, 1月号, 68-72, 大修館書店。(1990-1)、(ii) "Semantic Extension: The Case of Nonverbal Communication Verbs in English," *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, 806-825, Taishukan, Tokyo. (1997)、(iii) "A Dynamic Approach to the One's Way-Construction in English: From Simple Composition to Phrasal 'Lexical' Idioms to Constructional Idioms" *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, 588-603, Kaitakusha, Tokyo. (2003)、(iv) 「意味から形を見る: 優先規則体系と文法における拡張のメカニズム」, 日本英語学会第30回記念大会招聘発表原稿、未出版、名古屋大学。(2012)、があるが、それらの研究論文では、必ずしも構文における基本形、変種、優先条件、基本形から変種への拡張のメカニズムという観点から統一的に言語事実を整理し、その上で精緻な分析を立ててはいないし、現代英語の大規模コーパスによる資料収集も不徹底に終わっている。そこで現代英語の大規模コーパスを有効利用して新たに膨大な言語資料を収集する。特に、今回の科研で新たに取り上げる'd rather が文を従える構文については、英語の非常に末梢的な構文であるため、母国語話者の直感や手作業による資料収集だけでは、当

然ながら、分析に十分な言語資料が質、量とも得ることが極めて困難である。そこで現代英語の大規模コーパスを有効利用して膨大な言語資料を収集する。また、この構文に関して詳しく論じたものは Culicover (1999) だけしかなく、殆ど手が付けられていない構文であるので、今回の科研で新たに経験面でも理論面でも挑戦する。

(2) (1)で収集した膨大な言語資料を、複数の最先端の言語理論、生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法などの観点から、細かく観察し、鋭く深く分析することで、これら4つの構文の統語属性と意味属性を詳細に解明し、これら構文を成立させている優先条件を正確に同定する。これを達成するためには、当然、上記の複数の最先端の言語理論の内容を、最新の文献までつぶさに読むことで深く理解し、上記構文を分析できるまでに、身につけなければならない。申請者が、同族目的語構文、動作表現構文、One's Way 構文について論文を書いたのはそれぞれ1990, 1997, 2003である。その後、これら構文自体に関する研究も内外で多く出ているし、当然ながら、生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法のどの言語理論も大きな進展を見ている。1990, 1997, 2003以降に書かれた他の研究者によるこれら3つの構文に関わりを持つあらゆる記述的な研究文献と理論的な研究文献を読み、それら研究文献から、さらに3つの構文に関しての理解を深めると同時に生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法の進展についても把握する。

平成26年度:

(1) 上記平成25年度の研究計画を続行する。

(2) 4つのそれぞれの構文に関して、どの優先条件を欠いた時、どのような変種が存在することになるか、生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法の観点から、詳しく考察する。そして、実際にそのような変種が存在しているかを4つのそれぞれの構文に関して平成25年度の計画(1)で収集した言語資料を用いて検証する。

(3) 4つの構文におけるそれぞれの基本形と変種、それと、それぞれの4つの構文を特徴付ける優先条件が、生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法といった最先端の言語理論にいかなる帰結をもたらすことになるかも考察する。

平成27年度:

(1) 平成26年度の研究計画(2)(3)を続行する。

(2) 4つの構文の基本形、優先条件、変種の同定を行った後、各構文において基本形と変種をどのような理論的装置を使って関係づけるのが適切であるかを生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法の観点から、詳しく考察する。

(3) 4つの構文に共通な基本形から変種への拡張のメカニズムがないか考察しながら、

基本形から変種へと拡張を起こす一般的なメカニズムの解明に迫る。

(4) 同時に、競合する複数の先端言語理論から今後どのような言語理論が基本形から変種へと拡張を起こす一般的なメカニズムを適切に述べることができる妥当な言語理論の候補として残りうるかの絞り込みを行う。

(5) 本科研の研究成果を日本英語学会、英語語法文法学会、米国のハーバードと MIT が行っている HUMIT といった学会で口頭発表し、それら学会の機関誌に論文の形で投稿する。

4. 研究成果

平成 25 年度：

(1) 今回の科研で新たに取り上げる 'd rather が文を従える構文については、英語の非常に末梢的な構文であるため、母語話者の直感や手作業による資料集だけでは、当然ながら、分析に十分な言語資料が質、量ともに得ることが極めて困難である。そこで現代英語の大規模コーパスを有効利用して膨大な言語資料を収集した。また、この構文に関して詳しく論じたものは Culicover (1996) だけしかなく、殆ど手が付けられていない構文であるので、新たに優先規則体系の観点から、経験面に関しては収集した資料を整理した。

(2) (1) で収集した膨大な言語資料を、最先端の言語理論である、生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法などの観点から、細かく観察し、d' rather が文を従える構文の統語属性と意味属性を解明し、この構文を成立させている優先条件を正確に同定した。これを達成するためには、当然、上記の複数の最先端言語理論の内容を、最新の文献までつぶさに読むことで深く理解し、上記構文を分析できるまでに、身につけなければならないので、それらの文献を読んだ。

(3) 動作表現構文に関しても、Omuro (1997) で行った研究以降に出された研究を参考にしながら、上記(1)と(2)に平行した作業、考察を行った。

(4) 同族目的語構文に関してもその目的語の決定詞について、Omuro(2008)よりも事例を増やして考察した。

(5) 上記(1)(2)(3)(4)の成果の一部を講演や学会シンポジウムの形で口頭発表し、2本の論文を執筆した。

平成 26 年度：

(1) 本科研で扱う同族目的語構文、動作表現構文、One's Way 構文、'd rather が直接文を従える構文のうち、動作表現構文を特に取り上げ、動作表現構文で用いられる動詞が目的語として名詞句を取った場合と that 節を取った場合と更に受け身がかかった事例について、現代英語の大規模コーパスを利用して、言語資料の収集に努めた。

(2) (1) から得られた言語資料を、生成統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法

などの観点から、細かく観察し、動作表現構文において目的語として生じる名詞句については、基本的な意味を有したものと派生的な意味を有したものとがあることを同定した。また、動作表現構文に出る nod という動詞がとる that 節補部に関して、概念意味論の粹部身を用いて、項融合と強要の観点から、どのような that 節が許され、どのような that 節は許されないかを考察した。

(3) (1) から得られた言語資料を基に、更に、動作表現構文と同族目的語構文の受け身としてどのようなものが許され、どのようなものがゆるされないかの考察を拙論(1997)以降のいくつかの他者による論文を参考ししながら考察した。

(4) 本科研との関連から「構文の基本形と変種」という観点から、拙論(1988)で取り上げた半動名詞構文を取り上げ、大規模コーパスから新たに得た言語資料に基づき、拙論(1988)の修正をはかった。

(5) (2) と(3)を基に論文を1本執筆した。

(6) (4)を基に論文を1本執筆した。

平成 27 年度：

(1) 'd rather が直接文を従える構文の基本形から、疑問文において、would you rather という挿入節としての変種が可能となる文法拡張のメカニズムを考察した。

(2) 本科研との関連から「構文の基本形と変種」という観点から Arai (1997)を参考にしながら、拙論(1988)で取り上げた半動名詞構文の史的発達について、大規模コーパス COHA から得られた膨大な言語資料を分析することで、明らかにした。

(3) (1)を基に大室(2015)「優先規則体系とコーパス」を『コーパスと英文法・語法』に掲載した。

(4) (2)を基に、次期科研申請を見込みつつ、そのパイロットスタディとして第33回に本英語学会での公開特別シンポジウムの講師の一人として「構文の成立過程とその後の展開—半動名詞構文を中心に—」を発表し、その発表原稿を基に大室(印刷中)を執筆した。

(5) 本科研の理論的基盤となる生成文法理論による語彙意味論の多義語へのアプローチについて執筆し、2016年に公刊される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8件)

(1) 大室剛志、「非言語伝達動詞 nod の意味変化とその補部構造」『言語変化—動機とメカニズム—』、査読無、2013年、pp.253-270.開拓社。

(2) 大室剛志、「同族目的語の決定詞について」『言語におけるミスマッチ(福地肇教授

退職記念論集) 招待論文、2013 年、pp.1-10.
東北大学大学院情報科学研究科.

(3) 大室剛志、「構文に見られる拡張」『日本
英文学会第 8 5 回大会 Proceedings』、査読有、
2013 年、pp.205-206. 日本英文学会.

(4) 大室剛志、「動名詞から分詞への変化：
動詞 spend の補部再考」『言語研究の視座』、
招待論文、2015 年、pp.154-171. 開拓社.

(5) 大室剛志、「意味拡張、項融合そして強
要」『言葉のしんそう(深層・真相) - 大庭
幸男教授退職記念論集 - 』、招待論文、2015
年、pp.57-69. 英宝社.

(6) 大室剛志、「優先規則体系とコーパス」
『コーパスと英文法・語法』、査読有、2015
年、pp.169-194. ひつじ書房.

(7) 大室剛志、「構文の成立過程とその後の
展開-半動名詞構文を中心に-」『コーパスか
らわかる言語変化・変異と言語理論』(仮題)、
査読有、2016 年掲載確定、招待論文、pp.1-16.
開拓社.

(8) 大室剛志、「多義語の分析 I - 語彙意味論
的アプローチ」『語はなぜ多義になるのか-
コンテキストの作用を考える』(仮題)、査読
有、2016 年掲載確定、査読有、pp.1-20. 朝倉
書店.

〔学会発表〕(計 5 件)

(1) 大室剛志、「周辺の構文に見られる変種
に関するコーパス資料とその解釈をめぐっ
て」、英語コーパス学会第 3 9 回大会シンポ
ジウム、2013 年 10 月 5 日、東北大学.

(2) 大室剛志、「動作表現構文と意味拡張のメ
カニズム」、筑波英語学会第 3 4 回大会招待
講演、2013 年 11 月 16 日、筑波大学.

(3) 大室剛志、「意味拡張-動作表現構文の場
合」、言語系春のコロキウム招待講演、2014
年 3 月 14 日、北海道大学.

(4) 大室剛志、「使役を表す動詞の中身を探
る」、第 1 0 回英語語法文法セミナー、2014
年 8 月 4 日、関西学院大学.

(5) 大室剛志、「構文の成立過程とその後の展
開-半動名詞構文を中心に-」、日本英語学会
第 3 3 回大会公開特別シンポジウム、2015
年 11 月 21 日、関西外国語大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大室剛志 (OMURO, Takeshi)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：70185388